

国家は滅びようとも……

未来の世代に平和な世界を手渡したい

なだ いなだ

◆別荘を脱走兵援助に貸して◆

私は澤地さんより一つ年上なんですけど、ペ平連の時代をなつかしく思い出します。当時、鶴見良行さんに頼まれて、軽井沢の別荘を脱走兵のために貸していたんですけれど、脱走兵の中にも、サポーターの中にも非常にのんきな人たちがいました、ある日管理人から電話がかかって来て、私の別荘に外人と日本人の怪しげなグループがいて、大声で歌を歌って騒いでいる、最近別荘荒らしとかいるから、警察に届けましょうか、と言うんです。慌てましたね。管理人に知人だから心配するなどと返事する一方で、鶴見さんにも、逃亡してるとそれらを匿ってる者なんだから、あんまり人目に立つことをしないように、と注意したことがあります。その頃の思い出話は、あまり売れませんでした。『影の部分』（毎日新聞社、85年）という小説に書いてあります。私にとっても非常に忘れられない時代です。

◆横浜事件再審と裁判官の問題◆

いま澤地さんは、日本の植民地にいたときに、八月一五日を迎え、一夜にして日本国家

は消えてしまった、と話されましたが、それは外地でのこと、実は日本の国家はしぶとくて、消えていかなかったんですね。ついこの間、横浜事件の再審が決定されましたけれど、横浜事件というのを知っていた人、手を挙げてみて下さい。知らなかった人は？ 半数ぐらいですね。横浜事件の判決、特高に拷問されて、自首して、それをもとに有罪判決が下されたのですが、判決の下されたのは、いつかという戦後なんです。戦後だったということを知らなかった人、手を挙げて下さい。たくさんいますね。四五年の一〇月に、マッカーサーの司令部が特高と治安維持法を廃止せよと日本政府に要求するまでは、特高も生き続けていたし、そういう裁判も続いていたんです。しかもこの事件では、拷問によって、中央公論社の二人が死んだんですからね。そして一〇月に出された判決は、執行猶予つきではありましたが有罪、懲役二年だったんです。

一方、拷問をやった特高たちはどうなったかという、彼らも後になって訴えられ、一応有罪にはなったんですが、収監されること

は一度もなく生き延びたんです。こうしたことは、何と日本の百科事典にすべて書いてあるんですよ。しかもそれが分っていないながら、戦後の六〇年、ついこの間まで検察・警察は再審をずっと拒否し続けてきたんです。そういう事実を、私たちはぼんやりしていて、気がつかなかったのですよ。

憲法九条の問題にしても、今になって危うくなってきたわけではないのです。もつと以前に今の憲法を盛り立てて行く、あるいは私たちの方から積極的に憲法を改正する、という考えを持ってよかったんです。今の憲法の最大の問題は、裁判制度に関する条項にあります。最高裁判所の裁判官をやめさせたいと私たちが思ったら、どうすれば罷免できるのか。私たちは任命直後と、十年後の選挙のときバツ印をつけることぐらいしかできないのです。このままでいいのか、と私なんかは思っています。しかし今のようにならぬ、憲法改命守らなければならぬ時になって、憲法改正なんて言い出すとそちらの方に利用されてしまうから言い出せないでいるだけです。憲法というものを、もう一度読まなければいけない。

◆池澤夏樹の「新訳」日本国憲法◆

私は、正直に言いますが、憲法を通して読んだことはなかったんです、つい最近まで。前文や九条は何度も読みましたけどね。なぜかという、読んでもなかなか頭に残るよう



宣言からアメリカの独り立ちを言わすべのうそう人類

なやさしい文章で書いてないんですよね。それが、つい最近、池澤夏樹——ちようど戦争が終った年に生まれた作家です——その彼が『憲法なんて知らないよ』という本を書いて、その文庫本（集英社文庫、05年）の解説を頼まれたんです。この本は、彼が日本国憲法を英語から新しく自由に訳し直すという、実にうまいことを考えて作った本なんです。彼は、憲法の本質を考えて、誰でも読めるように、うまく訳してあります。こういうものを若い人たちに読ませるのはとても大切なことじゃないか、と思いますね。

九条にしても、そうやって読んで行くと、九条の条文がいかに世界の中でユニークなものか、ということが分ります。それから、日本の憲法というのは日本だけで作った憲法じゃなくて、世界の、フランス革命以後の人権

の遺産をみんな取りこんで作られてあるということですね。これは日本の憲法だけでなく、例えば、フランスの憲法の中には、アメリカのリンカーンのゲティスバーグ演説がそのまま入っているんです。憲法とはそういうもので、国を超えて、人類の理想を謳いこむことができるものなんです。それをもう一度、池澤の新訳日本国憲法を読むことで、確認してみたい。

◆ 国家は滅びても人間は生き続ける ◆

まあ、弱気にならずに、一緒にやりましょう。私も、不戦を理由に鶴見俊輔さんが捕まうて刑務所に行くことになったら、鶴見さんを支えて一緒に行こうと思っていますよ。鶴

爆撃の黒煙の外と内を結ぶ

——大阪、ベトナム、そして今イラク——

小田 実

ベトナム反戦運動が始まってから満四〇年、今月三〇日は、戦争が終わって満三〇年になるんですね。その日、兵庫県の芦屋で、集会「私たちはベトナム反戦運動から何を得たか、また、何を求めるか」を開きます。鶴見さんも来ます。運動に参加したさまざまな人たちは、何を求めたかをそれぞれ語り、その後生まれた若い人たちが運動に参加しなかつ

見さんは、先ほど、日本という国は滅びると思うと言われました。が、日本という国家なんて、滅びたって潰れたって構わないんです。しかし、人間は生き続けるんですからね。われわれが考えるのは、人間の問題なんです（拍手）。国のあり方は、われわれの決めることなのです。私たちの仕事は、戦争のない未来の世界を、次の世代の人たちに譲り渡したいということなんです。国なんて滅びようが、なくなろうが、問題じゃないんです。飛び込みですので、これだけ言わせていただいて引込みます。（拍手）

（なだ いなだ・作家、精神科医、「老人党」提案者。最近『専門馬鹿と馬鹿専門』を、ちくまから出版）

た人は、それから何を求めるかを語る予定です。ぜひいらつしやい。遠いなんて言わないで。私は西宮からここまで来てるんだもの。東京の人は自己中心的でねえ、地方の運動が大事だ、大事だなどとよく言うが、来たことないじゃない。芦屋の集会に来なさいよ。（このあと、この集会の会場である芦屋の山村サロンなどの案内が詳しく話されたが、省略）